仮面ライダーW 新たなる脅威と希望

オバキューム22

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーＷ　新たなる脅威と希望

【Ｎコード】
Ｎ８９１７Ｔ

【作者名】
オバキューム２２

【あらすじ】
秘密結社『ミュージアム』が滅びた今も、『ドーパント』と呼ばれる怪人による犯罪が続いている『風都』。左　翔太郎とフィリップ、そして照井　竜は『仮面ライダー』としてドーパントと戦い続けていた。そんなある日、２人の男が風都にやってきた。彼らの名は火神　正一と火神　隆二。彼らの来訪が新たな脅威の幕開けになることを、まだ誰も知らない…。

プロローグ

「全員集まったかしら？」

どこかの廃ビルの一室に、４人の男女が集まっていた。

「も～、何なんですかぁ？　今日はデートだっていうのにぃ～」

いかにも女子高生然とした少女が開口一番に文句を言う。

「オマエ…まだ恋人ごっこをやってたのか？」

大学生風の男は少女に対して呆れたように言う。

「これはこれで楽しいんだからいいじゃ～ん」

「けっ！　オマエにはついていけねぇよ」

「おしゃべりはそこまでになさい」

リーダー格の女は2人を制し、さっそく本題に入った。

「アナタたちに任務を与えるわ。このリストに載っている

『ガイアメモリ』を回収すること。それが今回の任務よ」

そう言って、リーダー格の女は3人にリストを渡した。

「えぇ～！？　こんなにあるのぉ～！？」

「オマエは黙ってろ、尻軽女」

「ちょっとぉ！　尻軽女とは何よ！　この変態ドＳ男！」

「んだとぉ！？」

「やれやれ…先が思いやられますな、ミス・ルイーネ」

２人の口論をよそに、初老の男はリーダー格の女…もといルイーネに話しかける。

「ところで、１つお願いしてもよろしいでしょうか？」

「何かしら？」

「今回の任務ですが、ガイアメモリの使用を許可していただきたいのですよ。

ガイアメモリを探すついでに、どれほどの力なのか試してみたいのでね…」

その言葉に男と少女は口論をやめ、ルイーネと初老の男に視線を移す。

「…いいわ、ガイアメモリの使用を許可する。ただし、

人目のあるところでの変身は避けること。いいわね？」

「承知しました。では、私はこれにて失礼」

そう言って、初老の男はその場を後にした。

「そんじゃ、オレも行くとするかぁ！」

「やんなっちゃうなぁ～…全部見つけるのは骨が折れそうだしぃ～…」

「だったら、オマエはのんびりデートでもしてろ。じゃあな」

男は少女を軽蔑するように言いながらその場を後にした。

「ム…ム・カ・ツ・ク～！　そんなに言うならやってやるわよ、ガイアメモリ探し！」

少女は不機嫌そうに言いながらその場を後にした。

これでこの場に残ったのはルイーネだけとなった。

「…ようやく…ようやく私の願いが叶う時が来た……長かった…実に長かったわ…」

誰に言い聞かせるわけでもなく、ルイーネはそう呟いた。

「う〝っ！　う〝う〝う〝う〝っ！！」

「い、痛い…！　痛いよぉ…！」

2人の少年は右腕を襲う激痛にうずくまっていた。何かにぶつけた…わけでも

…何でもないのに、どうしてこんなにも痛むのか？　2人には分からなかった。

（助けてよ…！　お父さん…！　お母さん…！）

駆けつけてきた両親に手を伸ばす2人。…しかし、悲劇は起きた。

「うわあああっ！？」

「きゃあああっ！？」

「「お父さん！？　お母さん！？」」

触れた途端、両親は糸みたいなものに全身を巻きつかれ…そして爆発した。

「お父さぁぁぁん！！　お母さぁぁぁん！！　う…うわあああああ！！！」

「お父さん…お母さん……あぁぁぁあああぁぁぁぁぁあああああ！！！」

街に2人の叫びがこだました…

「――――はっ！？」

青年は夢を見ていた。昔住んでいた街に起きた事件の夢を…

「……はぁ……久しぶりだな、あの夢を見るのは…」

そう呟きながらベッドから起き上がり、玄関のトビラを開けて郵便物を見てみる。

「ん？　これは…」

青年の目に留まったのは一通の手紙だった。その手紙が自らの運命を大きく揺るがすことになろうとは、この時の青年は知る由もなかった。

プロローグ（後書き）

次回、仮面ライダーＷ！

「お願いです…私を助けてください！」

「実は一昨日、こんな手紙が届いて…」

「１日経っても帰ってこないからさすがにおかしいと思って…」

「変身！」

《ＣＹＣＬＯＮＥ！　ＪＯＫＥＲ！》

「あ、あれって…もしかして仮面ライダー！？」

「「さぁ、オマエの罪を数えろ！」」

「私の計画のためにも…アナタを失うわけにはいかない」

「Ｋの想い／命を狙われる女」これで決まりだ！

Kの想い／命を狙われる女

至るところに風車が回るエコの街、『風都』。その風都に2人の男がやってきた。

白いニット帽に赤いパーカーを着ており、泣きボクロが右にある方が火神　正一。

黒いニット帽に緑のパーカーを着ており、泣きボクロが左にある方が火神　隆二。

2人は双子の兄弟で、かつてはこの風都で暮らしていた。

「懐かしいなぁ…いつもここで3人と遊んでたっけ」

『あゆみ公園』と書かれた公園を見ながら感慨深げに言う正一。

「あれからもう12年も経つんだね…」

自分たちがこの街から離れた年月の長さに、隆二も感慨にふけっていた。

「12年、か。まさか今になってここに戻るなんてな…」

「そう、だね…」

…と、そうしているうちに2人は目的の場所に着いた。

「ここだな…よし、行くか」

「うん」

そう言って、２人は目の前の建物の中に入っていった。

その建物の屋根には、カモメがクルクルと回っていた。

「ったく、最近はペット探しばっかだな…」

彼の名は左　翔太郎。『鳴海探偵事務所』に所属する私立探偵である。

「たまにはハードボイルドな依頼でも来ねぇかな…」

仕事の内容が気に入らないのか、そんなことを呟いていた。…と、その時だった。

「あ、あの…スミマセン！」

「ん？」

翔太郎は声がした方を振り向くと、そこには金髪でポニーテールをした女性がいた。

だが、よく見ると彼女の両腕と両足に最近できたばかりの切り傷がいくつもあった。

「おい…どうしたんだ、それ――――」

「お願いです…私を助けてください！」

「……！」

女性は事情を聞こうとする翔太郎の言葉を遮ってそう頼み込んだ。

どうやら相当切羽詰まっているようだな…翔太郎はそう直感した。

「…分かった。話は事務所で聞くからついてきな。コーヒーをご馳走してやるぜ」

「は、はい…」

そう言って、2人は鳴海探偵事務所に向かった。

その様子を見ていた者がいるとも気づかずに…

一方、鳴海探偵事務所に2人の依頼人がやってきた。火神　正一と火神　隆二である。

「人探し？」

「ああ。実は一昨日、こんな手紙が届いて…」

そう言って、正一はショルダーバッグから手紙の入った封筒を取り出した。

それを受け取った照井　亜樹子（旧姓：鳴海）は手紙の内容を読み始めた。

【カズくん、リュウくん、アナタたち2人に大事な話があるの。直接話がしたいから、

風都にあるアパート『五木荘』に来てちょうだい。2人が来るのを待ってるからね。

河奈土　百華】

亜樹子が手紙を読み終えたところで、正一は口を開く。

「それで昨日、オレたちはアイツが住んでいるアパートに訪れたんだ。…だけど、

アイツはいなかった。最初は出かけてるのだと思ってアイツが帰ってくるのを

待っていたけど、1日経っても帰ってこないからさすがにおかしいと思って…」

「それでここに来たんですか？」

亜樹子がそう言うと、正一と隆二は無言で頷いた。

「困り果てていたボクたちに、アパートの大家さんがここを紹介してもらったんです」

「それで…引き受けてくれるか？」

「任せてください！　ウチには専門家がいますから！　さっそく連絡っと―――」

「亜樹ちゃん、そのことなんだけど…」

「何？　…って、それ！？」

翔太郎に連絡しようとする亜樹子だが、１人の少年がそれに待ったをかけた。

彼の名はフィリップ（本名：園咲　来人）。探偵にして翔太郎の相棒である。

ちなみに、彼の腰には『ダブルドライバー』と呼ばれるベルトが現れていた。

それが現れたということは、翔太郎がドーパントに遭遇したことを意味する。

「悪いけど、２人にしばらく待ってもらえるよう説得してくれないかい？」

「えっ！？　ちょ、ちょっとフィリップくん！？」

《ＣＹＣＬＯＮＥ！》

２人の説得を任されたことに抗議しようとする亜樹子だが、当のフィリップは

そんなことはお構いなしとばかりに『サイクロンメモリ』のスイッチを押した。

「変身！」

そして、掛け声と共にサイクロンメモリをダブルドライバーに差し込んだ。

すると、サイクロンメモリが消失し、フィリップはその場で倒れてしまう。

それを見た正一と隆二は何があったのか分からず、困惑するばかりだった。

「お、おい！　大丈夫なのか！？」

「だ、だいじょーぶ！　フィリップくんは今、翔太郎くんのところへ行ったから！」

「「は、はぁ…？」」

亜樹子のメチャクチャな説明にますます混乱してしまう２人であった。

時を遡ること数分前、翔太郎たちは人気の少ない道を通っていた。
何故なら、女性は何者かに命を狙われている可能性があるからだ。
翔太郎は長年培った土地勘をフルに活用し、慎重に進んでいった。
「もう少しすれば事務所に着く。…なぁ、本当に大丈夫なのか？」
「あ、はい。これぐらい平気ですから」
女性のおぼつかない足取りに心配する翔太郎だが、女性は精一杯の笑顔で返した。
かわいい顔して結構根性のあるお嬢さんだな…と翔太郎が思った、その時だった。
「！　危ない！！」
「きゃっ！？」
突如、真空波のようなものが彼女に向かって飛んできた。翔太郎が気づいたおかげで
彼女は無事だったが、もし気づくのが遅かったらと思うと…背筋が凍りそうになった。
「どこだ！？　どこにいやがる！？」

翔太郎は女性を安全なところに避難させ、襲撃者を捜す。
しかし、いくら捜しても襲撃者の姿は見当たらなかった。
「どこかに隠れてやがんな…だったら！」
《ＤＥＮＤＥＮ》
翔太郎はペット探しに使うはずだった『デンデンセンサー』を取り出し、
それに『デンデンメモリ』を差し込んだ。すると、デンデンセンサーは
カタツムリ型のライブモードに変形し、触角から発する赤いセンサーで
襲撃者の居場所を特定することに成功。翔太郎はその場所へと向かった。
「見つけたぜ！」
「！？　チッ！」
襲撃者…もといドーパントは舌打ちしつつも右腕を大きく振ると、
右上腕についている小さな鎌から先ほどと同じ真空波が放たれた。
「うおっ！」

一瞬虚を突かれた翔太郎だが、何とか避けきれた。

「あんなもん喰らったらひとたまりもねぇ…フィリップ！」

翔太郎はダブルドライバーを腰に装着し、『ジョーカーメモリ』のスイッチを押す。

《ＪＯＫＥＲ！》

「変身！」

翔太郎はダブルドライバーの右側に転送されたサイクロンメモリを差し込み、

そしてもう片方に自身のジョーカーメモリを差し込んでバックルを展開した。

《ＣＹＣＬＯＮＥ！　ＪＯＫＥＲ！》

翔太郎の周りに風が纏い、緑と黒の戦士『仮面ライダーＷ』へと姿が変わっていく。

「あ、あれって…もしかして仮面ライダー！？」

その一部始終を見ていた女性は驚愕した。

「オ、オマエ！　仮面ライダーだったのか！？」

ドーパントも同様に驚いていた。

「「さぁ、オマエの罪を数えろ！」」

変身を完了したWはドーパントを指差し、決めゼリフを言った。

「うぉら！！」

「ぐわぁ！？」

Wはドーパントに向かって走り出し、飛び蹴りを喰らわせた。

「くそぉ！」

「よっと！」

ドーパントは再び真空波を放つが、またしても避けられてしまう。

「あの鎌から発する真空波…スピードは申し分ないが、出が遅いのが欠点だね」

「くっ…！　だったらこれでどうだ！」

ドーパントは左上腕にも鎌を出し、今度は接近戦で勝負してきた。

「おらおらおらおらおらぁ！！」

あまりの猛攻にWは避けるのが精一杯で、なかなか反撃できないでいた。

「くそっ！　これじゃ反撃できねぇ！」

「翔太郎、ジョーカーでは分が悪い。ここはメタルに変えよう」

「だな！」

後ろに飛び退いたWはジョーカーメモリを抜き、『メタルメモリ』のスイッチを押す。

《ＭＥＴＡＬ！》

そしてドライバーの左側にメタルメモリを差し込み、バックルを展開した。

《ＣＹＣＬＯＮＥ！　ＭＥＴＡＬ！》

すると、Wのボディサイドが銀色に変わり、背中には『メタルシャフト』が現れた。

「行くぜ！」

Wはメタルシャフトを背中から抜き、ドーパントに向かって走り出した。

「うぉら！！」

Wはメタルシャフトを叩き込むが、ドーパントは鎌でそれを受け止めた。

「何！？」

「おらぁ！！」

「ぐっ！」

そこへもう片方の鎌で斬りつけるが、Wはそれをメタルシャフトで何とか防いだ。

「野郎！　はっ！　はぁ！！」

Wはメタルシャフトを巧みに操り、連続攻撃を仕掛ける。だが、ドーパントは

それを2本の鎌で難なく受け止め、スキができたところを狙って反撃してくる。

「ぐあっ！！」

Wはドーパントの猛攻を防ぎきれなくなり、ついには攻撃を喰らってしまった。

「あの鎌…！　思ったより厄介だな…！」

「なら、こっちもメモリを変えよう」

そう言って、Wはサイクロンメモリを抜き、『ルナメモリ』のスイッチを押す。

《ＬＵＮＡ！》

そしてドライバーの右側にルナメモリを差し込み、バックルを展開

した。

《ＬＵＮＡ！　ＭＥＴＡＬ！》

すると、Ｗのソウルサイドが黄色に変わった。

「はっ！　色が変わったところで何も変わりはしねぇよ！」

「どうかな？　はぁ！！」

メタルシャフトはまるで鞭のように伸び、ドーパントに叩きつけた。

「がっ！　な、何だよ今のは！？」

「ははん、どんどん行くぜ！」

ドーパントはメタルシャフトの変則的な動きに翻弄され、一方的に攻撃を受けていた。

「ぐあああっ！！　ち、畜生…！」

「翔太郎、そろそろ決めよう」

「ああ、メモリブレイクだ」

Ｗはメタルメモリを抜き取り、それをメタルシャフトのスロットに差し込んだ。

《ＭＥＴＡＬ！　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！》

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

Wは鞭状のメタルシャフトを円を描くように振り回し、黄色の光輪を複数生成する。

「「メタルイリュージョン！！」」

そして技名を叫び、生成された光輪をドーパントに向かって弾き飛ばした。

「うわあああああ！！！」

ドーパントは全方位からの攻撃を避けることができず、絶叫と共に爆発した。

「決まったな…」

勝利を確信するW。…が、しかし。

「あ？　……何！？」

煙が晴れると、そこには何もなかった。ガイアメモリの使用者も、ガイアメモリも。

「いない！？　どういうことだ！？」

「ヤツがアレを避けたとは思えない…まさか、誰かがヤツを…？」

「ご名答。なかなか鋭いわね、Wの右側くん」

「「！？」」
Wは声がした方を振り向くと、そこには黒のソフト帽に紫のスーツを着た
女が立っていた。しかも、その隣には先ほどまで戦ったドーパントもいた。
「わ、わりぃ…助かったぜ…」
「私の計画のためにも…アナタを失うわけにはいかない」
女はドーパントの方に顔を向けてそう口にした。
「オマエはいったい…？」
「私はルイーネ。いずれこの風都を破滅へと導く者よ」
「何…？」
「覚えておきなさい、仮面ライダーW。これが始まりであることを…」
そう言って、ルイーネとドーパントはその場を去ろうと背を向ける。
「おい待て――――！？」
Wはそれを止めようとするが、ルイーネとドーパントはまるで煙のように姿を消した。
「消えた！？」

「まさか、今のはゾーンの瞬間移動…！？」

ゾーンとは、任意の対象物を他の場所に転送する『ゾーンメモリ』の能力である。

「そんなバカな！　生身のままメモリの力を使ったって言うのかよ！？」

翔太郎がそう言うのも無理はない。何故なら、ガイアメモリの力はドーパント態でなければ引き出せないようになっているからである。

だが、実は人間態でも力を引き出す方法が存在する。それは――――

「翔太郎、『インビジブルメモリ』の事件を覚えているかい？」

「インビジブルって、確かリリィが透明になったっていうアレか？」

翔太郎の言うリリィとは、風都でマジシャンをしているリリィ白銀のことである。

現在はマジシャンの傍ら、祖父・フランク白銀と共に喫茶店を切り盛りしている。

「そう。彼女は井坂　深紅郎が改造したインビジブルメモリを人体に挿入したことで、

人間態のまま透明になることができた。それと同じケースということが考えられる」

「なるほど…その可能性は十分あるな…」

「だが、まだ確証を得たわけではない。もっと詳しく調べてみる必要がありそうだ」

「そうだな…頼むぜ、相棒」

「ああ」

そう言って、Wは変身を解いた。元の姿に戻った翔太郎は女性の下に駆けつけた。

「あ？　どこいったんだ？」

しかし、いくら捜しても女性はどこにもいなかった。

「どうなってるんだ…？　確かここら辺に隠れていたはず――――」

そこで翔太郎はある可能性に気づいた。

「まさか…アイツらに！？」

そう、ルイーネはゾーンと思われる力を使って瞬間移動した。

ならば、その時に女性も一緒に瞬間移動されたのではないか？

「くそっ！！」

そう思い至った翔太郎は依頼人を守れなかったことを

悔やみつつも、すぐさま鳴海探偵事務所へと向かった。

「ん…」

変身を解いたことにより、フィリップの意識は自身の身体へと戻った。

「あ、起きたみたいだね」

「キミは…火神　隆二？」

フィリップの視界に最初に映ったのは、依頼人の片割れである火神隆二だった。

「……亜樹ちゃんと火神　正一はどうしたんだい？」

亜樹子と正一がいないことに気づいたフィリップは、隆二にそう尋ねた。

「ああ、2人ならさっき調査に出かけたよ」

「なるほど。…しかし、火神　正一は何故亜樹ちゃんと一緒に？」

「…キミが倒れた後、所長さんから色々聞いたよ。ドーパントという怪人のこと、

キミたちのこと、そして…キミと翔太郎さんが変身する仮面ライダーのことを。

…正直、今でもまだちょっと信じられないんだけど…それってホントなのかい？」

「…信じるか否かはキミの好きにしたまえ。それで、それがどう関係するんだい？」

「ああ、ゴメン。それで、所長さんから話を聞いた後、兄さんが――」

「自分たちで捜すぅ！？」

亜樹子の素っ頓狂な声が事務所内に響き渡った。

「ああ。別にアンタの話を信じたわけじゃないが、

今のアンタたちに百華を捜す余裕はないんだろ？」

「だ、大丈夫！　ほら！　私がいるじゃない！」

「いや…アンタはそこの変なヤツを看とかなきゃいけないだろ？」

正一は奥のベッドにいるフィリップを指差しながらそう言った。

「フィリップくんのことなら大丈夫だって！　いつものことだから！」

（それはそれでどうなんだ…？）

「…だったら、ボクが彼を看てあげるよ」

「え？　…いいの？」

隆二の提案に驚く亜樹子。

「構わないよ。ド素人2人で行っても仕方ないしね」

「…わりぃな、いつもいつも留守番任せちまって」

「いいよ、もう慣れてるから…ほら、早く行きなよ」

「…分かった、行ってくるよ」

そう言って、正一は事務所を後にした。

「…って、アンタは行くのかい！　待ってよ～！」

亜樹子は慌てて正一の後を追った。

「――とまぁ、そんなわけなんだ」

「ふむ…キミのお兄さんは河奈土　百華のことがよほど心配だったんだね」

「まぁね…これは内緒だけど、兄さんは彼女のことが――」

…と、その時だった。

「フィリップ！！」

「うわっ！？」

隆二の言葉を遮るように現れたのは翔太郎だった。

「どうしたんだい、翔太郎…？」

（翔太郎…？　ってことは、この人が所長さんの言ってた左　翔太郎さんか）

「今すぐ『地球（ほし）の本棚』に入ってくれ！　依頼人の命がかかってるんだ！」

「依頼人の命が…？」

翔太郎のただならぬ様子に、フィリップはすぐさまベッドから立ち上がった。

「分かった、すぐに検索を始めよう。それで、依頼人の名前は？」

「依頼人の名前は…河奈土　百華だ」

「えっ！？」

「河奈土…百華…？」

翔太郎の口から出たその名前に、フィリップと隆二は驚きを隠せなかった。

Kの想い／命を狙われる女（後書き）

次回、仮面ライダーW！

「オレはハッキリと見たんだよ…オマエがガイアメモリを落とすところをな！」

「オレはもう…これ以上何かを失いたくないんだ…」

「また試作品メモリによる暴走か！？」

「下がってろ、所長…あとはオレがやる」

「アナタは…誰…？」

「Kの想い／失った記憶」これで決まりだ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8917t/

仮面ライダーW 新たなる脅威と希望

2011年10月9日07時45分発行